

月刊

地域保健

12
2015

●特集

難病保健を推進するために

●統括に聞く

松野京子さん《藤枝市 健康福祉部 福祉政策課 課長》

●ピープル

本田 徹さん《医師、(特活)シェア＝国際保健協力市民の会(SHARE)代表理事》



8

特集

難病保健を推進するために

10 《座談会》難病保健の新展開と保健師の役割

出席者 小川一枝さん（東京都医学総合研究所）＝司会
 小倉朗子さん（東京都医学総合研究所）
 佐川きよみさん（東京都葛飾区保健予防課、全国保健師長会）
 川尻洋美さん（群馬県難病相談支援センター）
 今若陽子さん（島根県出雲保健所）

34 地域包括ケアシステムと難病対策

宇田英典（鹿児島県伊集院保健所、全国保健所長会）

40 難病患者の就労支援

伊藤美千代（東京医療保健大学）

1

統括に聞く

松野京子さん（藤枝市 健康福祉部 福祉政策課 課長）

56

隔月連載

東日本大震災で求められている公衆衛生活動とは《第11回》

97

ひよこ、ホップ、ステップ、ジャンプ！

野内菜美子さん（福島県相双保健福祉事務所 健康福祉部 健康増進課）

102

ピープル

本田 徹さん（医師、〈特活〉シェア＝国際保健協力市民の会（SHARE）代表理事）

連載

- | | | |
|----|------------------------------|-----------|
| 48 | 健康政策に活かす保健師活動の評価と「見える化」《第3回》 | 岸恵美子ほか |
| 62 | 理解して生かす保健師用語《第9回》 | 「コンピテンシー」 |
| 64 | ESSAY 国際保健《第9回》 | 松田正己 |
| 66 | 保健師のための閑話ケア《第60回》 | 藤本裕明 |
| 70 | 中臣さんの 環境衛生ウォッチング《第45回》 | 中臣昌広 |
| 75 | いまだき子育てアドバイス《第219回》 | 中川信子 |

統括に聞く

静岡県
藤枝市

健康優良都市を守る人材育成プログラム作成を目指して

管理職になっても市民目線を忘れない保健師でいたい

松野京子さん

● 藤枝市健康福祉部福祉政策課 課長



藤枝総合運動公園サッカー場前にて

文：白井美樹（ライター） 写真：カミヤス セイ

静岡県の中央部に位置する藤枝市は、温暖な気候に恵まれ、お茶やみかんの産地として名高い。それに加え、「サッカーのまち」としても全国的に有名だ。

松野京子さんは、そんな藤枝市の中でも、のどかな田園風景が広がる大洲おおしゅうという地域で生まれ育った。

松野さんが保健師になるための土壌は、幼少期からすでに備わっていたようだ。大洲には、なぜか保健師が多く住んでいて、身近な存在だったのだという。小学校のころに夢見ていたのは、看護師になることだった。それが、保健師になるに至ったのは、お母さんの言葉が大きく影響した。

「母は地元の土地改良事務所に勤めていて、そこに保健師が月に1回、出張相談に来ていました。事務所内で町民の健康診断や、子どもの身体検査をしていたのです。保健師さんたちの働きを見ていた母から、『看護師の資格を

取るなら、保健師の資格も取った方がいいのでは』と勧められました」

思いついたら即行動 新人時代の勇み足

静岡県立女子短期大学看護学部3年、県立厚生保育専門学校に1年通って保健師の資格を取得。もともと人が大好きで、人に関わる仕事がしたいと思っていた松野さん。病院内だけで働く看護師よりも、生活まで介入できる保健師の方が、より深くその人の人生に関われるのではないかと思い、最終的には保健師の道を選んだ。

晴れて藤枝市に就職したが、新任期のころは、上司から叱られることが多かったという。

「あるとき地元の人から『保健講座で話をしに来て』と頼まれました。保健師として認められ、声を掛けてくれたのがうれしくて、喜んで出掛けていきました。ところが市の仕事ではなく、

個人として行ってしまったので、後で上司から厳しく注意を受けました」

そのころは、恐い先輩たちがいて、叱られてはトイレで泣くこともあったとか。そんなときには、いつも同期と慰め合っていたが、厳しい先輩がいたからこそ、保健師内の結束が高まったのかもしれないという。そんな新任期に、松野さんは多くの経験を積み、保健師の仕事を手得していく。

「生後数カ月の障害のあるお子さんの家に訪問に行ったときのことです。お母さんから、子育てに関する不安を涙



今年1月から難病法が施行され、9月には「難病の患者に対する医療等の総合的な推進を図るための基本的な方針」(基本方針)が公表された。2013(平成25)年1月の「難病対策の改革について」(提言)の取りまとめの後、議論が続いていた新しい難病保健の在り方は、一つの節目を迎えたことになる。今月号では、今後の難病対策における保健師の役割を考察する。座談会では、保健所、難病相談支援センターなどの立場から、新しい制度下における保健師の難病保健、難病支援の在り方について話し合う。さらに地域包括ケアシステムと難病対策、難病患者の就労支援についても考察を加える。

難病保健を 推進するために

P34 地域包括ケアシステムと難病対策

◎宇田典典(鹿児島県伊集院保健所、全国保健所長会)



P40 難病患者の就労支援

◎伊藤美千代(東京医療保健大学)



P10 《座談会》 難病保健の新展開と保健師の役割



◆東京都医学総合研究所
小倉朗子さん



◆東京都医学総合研究所
司会
小川一枝さん



◆東京都葛飾区保健予防課、全国保健師長会
佐川きよみさん



◆群馬県難病相談支援センター
川尻洋美さん



◆島根県出雲保健所
今若陽子さん

難病保健の新展開と 保健師の役割

司会

小川 一枝さん（東京都医学総合研究所 難病ケア看護研究室 難病医療専門員〈保健師〉）

小倉 朗子さん（東京都医学総合研究所 難病ケア看護プロジェクト 主席研究員〈保健師〉）

佐川 きよみさん（東京都葛飾区保健予防課 感染症対策係 係長〈保健師〉、全国保健師長会 副会長）

川尻 洋美さん（群馬県難病相談支援センター、難病相談支援員〈保健師〉）

今若 陽子さん（島根県出雲保健所 医事・難病支援課 課長〈保健師〉）

小川（司会） 司会を務めさせていただく小川です。東京都医学総合研究所所属の難病医療専門員として、東京都内の保健所や難病拠点病院の支援をしています。以前は東京都の保健師でした。よろしくお願ひします。

小倉 同じく東京都医学総合研究所の小倉です。保健師の研究員です。難病保健に関する保健師の研修や、国の研究班で、保健所の保健師の活動推進に関わるなど、現場の保健師活動に憧れを抱きつつ、周辺的な立場から難病保

健活動に関わっています。

川尻 群馬県難病相談支援センター（以下、支援センター）の川尻です。難病相談支援員で保健師です。群馬県は2004（平成16）年4月から支援

センター事業を開始し、群馬大学に研究委託事業として委託しました。運営主体は医療機関で、支援センターは群馬大学附属病院の敷地内にあります。また、国の研究班で支援センターの役割というテーマをいただいて、研究を継続しております。よろしくお願ひいたします。

今若 島根県出雲保健所の医事・難病支援課で保健師をしている今若です。島根県には7保健所があり、出雲保健所の圏域人口は17万人ぐらいです。

本庁にいたときの04（平成16）年に難病を直接担当する部署に所属していました。一時期、難病とは関係ない部署へ異動しましたが、07（平成19）年に出雲保健所勤務となり、難病を担当する今の課へ配属されました。

佐川 東京都の葛飾区で保健師をしている佐川です。きょうは特別区の保健

師として、また全国保健師長会の立場で出席させていただいております。特別区の保健所（保健センター）では都道府県業務と市町村業務を一緒に行っているの、母子保健事業や難病対策など、保健対策全部を保健所の地区担当保健師が地区活動の中で行っています。

現在は保健所ではなく本庁の保健予防課の感染症対策係に所属し、区の保健師の人材育成も担当しています。

保健師が難病保健に関わるために

小川 今年1月に「難病の患者に対する医療等に関する法律」（以下、難病法）が施行され、9月15日には厚生労働省から都道府県と指定都市に「難病の患者に対する医療等の総合的な推進を図るための基本的な方針」（以下、基本方針）が通知されました。基本方針については後ほど触れるとして、制度改

正前の難病保健の状況について、小倉さんからお話いただけますか。

小倉 昨年度、厚生労働科学研究費補助金難病性疾患政策研究事業「難病患者への支援体制に関する研究」で、都道府県および保健所設置市（含む特別区）を対象に、難病保健活動と難病事業の実施状況、難病保健を支える人材育成の状況などの調査をさせていただきました。その結果、難病対策を積極的に進めている所と取り組めていない所があることがはっきり見えてきました。この差は、今まで難病対策が法に基づかない事業として行われてきたことなどが影響しているのだと思います。

また、難病の保健活動のための各都道府県等における研修等の実施がなく、加えて、他機関による研修への派遣（特定疾患医療従事者研修〈難病事業の一つとして位置づけられているもの〉）や、東京都医学総合研究所の



大好きな福島のために 自分の力を尽くしていきたい

の う ち な み こ
野内菜美子さん

● 福島県相双保健福祉事務所
健康福祉部 健康増進課



文＝太田美由紀（ライター） 写真＝ C.Kent

福島県相双保健福祉事務所は、福島県の太平洋側に位置する「浜通り」にある。東日本大震災では、津波による被害も大きく、東京電力福島第一原子力発電所の事故により甚大な影響を受けた地域だ。相馬市、南相馬市、双葉郡、相馬郡の2市7町3村を管轄区域とし、現在も避難をしている住民も多いが、相双保健福祉事務所のある南相馬市の大部分では、穏やかな生活が営まれている。

野内菜美子さんは、福島県で生まれ育ち、福島県をこよなく愛する27歳。福島のため、看護師としての5年の勤務を経て2015（平成27）年4月から福島県の保健師となった。

弟が心肺停止になり 医療の力を感じた

「私の両親も県職員で、福島県内で引越しを何度かしています。4歳までは母の実家のある会津若松でのんびり過

ごしました。その後は福島市内に引越しましたが、福島県から出たことは一度もないんですよ」

そう言って笑う野内さんは、子どものころから看護師に憧れていた。

「4つ下の弟が1歳のとき、喉にものを詰まらせて心肺停止になりました。細かい状況は覚えていませんが、そのとき、両親が心配していた顔は今でも忘れられません。弟は元気になり、その後何事もなく過ごしています。その

一件があつて以来、医療の力つてすごいなと思っていましたし、私もアトピー性皮膚炎で通院が長かったので、看護師はとても身近な仕事でした」

小学校ではマーチングバンド部長、中学校では生徒会活動で監査を務めた。習い続けていたダンスにも没頭し、体を動かするのが大好きだったという。

「前に出て引つ張るより、後ろからみんなをサポートすることが楽しかったですね。中学校からテニス部に所属し





全ての人の命が尊重され、
健康を享受できる世界を目指して

プライマリ・ヘルス・ケアの理念を貫く



本田 徹さん

医師、特活 シェアⅡ国際保健協力市民の会（SHARE）代表理事

●聞き手 余田雅美（ライター）

本田徹さんは、（特活）シェアⅡ国際保健協力市民の会の代表理事でもあり、長年、日雇い労働者の街として知られる東京都台東区・山谷で地域医療や在宅医療などに取り組んでいる。その他にも、カンボジアやタイ、東ティモールなどの途上国における地域保健活動や、国内の在住外国人の健康支援など、国内外の医療や保健に恵まれない人々への健康支援活動が続いている。こうした活動の原点となっているのが、プライマリ・ヘルス・ケアの理念である。本田さんが目指すプライマリ・ヘルス・ケアとはどのようなものか、お話を伺った。

チュニジアでの地域保健活動、そして、プライマリ・ヘルス・ケアとの出会い

—本田さんは、臨床医の道に進まれた後にNGO活動を始められていますね。医学生の中からNGOに関心を持たれていたのですか？

本田 私が北海道大学医学部に入った1966（昭和41）年は、全国で大学紛争が盛んで、とうてい勉強に集中で

きる状態ではありませんでした。それでも何とか卒業することができたので、とにかく臨床を覚えるならば小児科だと思い、小児科を選択しました。

ところが、小児科医2年目に、フロイト研究で有名な慶應義塾大学医学部精神科医の小此木圭吾先生が書いた『モラトリウム人間の時代』（中央公論新社）に出会い、「長い人生の中、自分がどんな人間になりたいのかを決める前に、自分を見つめたり、自分の可能性を探ってみたりするモラトリウム

PROFILE

●ほんだ・とおる●

1947年愛知県生まれ。北海道大学医学部卒業後、病院に勤務。青年海外協力隊員としてチュニジアで活動後、長野県厚生連佐久総合病院、東京・日産厚生会玉川病院に勤務。1983年にシェア設立に参加。山谷地区の医療活動、エチオピアでの飢餓被災民緊急支援に参加。1988年にカンボジア母子保健プロジェクトに派遣、シェアの代表に就く。タイ国マヒドン大学でプライマリ・ヘルス・ケアを学び、帰国後はルワンダ難民支援、阪神大震災医療活動、東ティモール緊急支援、東日本大震災緊急支援などに参加。現在は台東区浅草病院の勤務医、山谷のNPO法人山友会クリニックのボランティアなども行う。大山健康財団健康激励賞、第16回若月賞、毎日社会福祉顕彰受賞。編著「アジア旅行者のための感染症対策」（連合出版）、著書「人は必ず老いる その時だれがケアするか」（角川学芸出版）等がある。

な時間があってもよいのだ」と思い込んでしまった（笑）。要は、大学紛争後の虚脱化した状況の中で、自分は社会の中でどういった医師であるべきかと悩んでいたのだと思います。